

焦土からの復活にむけて

マダガスカルの自然破壊

島 泰 三

|| はじめに

友人から送られてきた手紙に、宇宙からみた地球の夜の光景の新聞写真が同封されていた。そこには電気の明りできらめく北半球と、野焼きの炎であぶられた南半球が描かれていた。その手紙を受け取った直後に、マダガスカルの西海岸を旅して、飛行機から夜の闇の中の野焼きの炎の列を見た。それは、これまでいくたびか火煙の中を車でぐり抜けてきた私にも、戦慄するような光景だった。なぜこんなことが起こっているのか、それはどういうことなのか、どうしたら自然を回復できるのか。この小論文では、これらの問題をたどってみたい。

|| マングキ川の河畔にて

マングキ川はマダガスカル4大河川の一つで、同国第2の都市フィアナランツア周辺の高地を源流として、南西部の小都市ムルンベの北でモザンビーク海峡に出る。この河口から120キロ上流の両岸に、この地域最大の原生林が広がっている。

むろんまともな道がそこまで続いているわけではないが、とにかく幸運にもその森の周辺の集落

にたどりつき、マングキ川に至る道をみつけ、その村から2日間かけて森を抜け、川岸にキャンプを張った。その夜、夕食を食べているとテントの外が突然真っ赤になり、私は外に飛び出した。

私たちのテントから森の方角約30メートルのところで、立木を焼いて炎が燃えあがっていた。ちょうど乾期の最中で、何もかもまるで焦げたように乾燥しており、コップに残った水を地面に撒くと、土ほこりが舞い上がるほどだった。

見るまに炎は大きく立ち上がり、一本の木は完全に炎に包まれ、枝は火の筋を引いて次々に落ち、それらは地面に落ちてはじけるように炎を吹き上げ、また燃え広がっていった。

しかし、息をのんで炎を見つめていた私に聞こえてきたのは、口笛だった。炎の傍らを若者の影が通り過ぎ、彼はのんびりと口笛を吹いていた。

乾期の終わりに野を焼くのは、牛のために柔らかい草を育て、枯れ草を焼いてできた灰を肥料にするためだと説明する現地人と、それを真に受けて、肥料を買えない国民にはこの方法もやむを得ない、と受け売りする人がある。しかし、牧畜の適地をつくるためには管理が必要で、ただ火をつけるだけでは草原を維持するどころか、腐食土層は消滅し、表土は簡単に失われる。野焼きが続けば、表土の下層の砂礫や鉄・アルミナの硬化層(ラ

テライト皮殻)も露出する。こうして土壌浸食を伴うバットランド化が続き、1ヘクタール当り1年間に1000立法メートルにも達するといわれる土砂の流出がおこり、サバンナ化どころか砂漠化が進行することになる。

マダガスカルの中中部から西部と南部にかけて、日本の全面積に匹敵する草原は黒々と焼けた砂礫の平原に姿を変え、この平原から西海岸へ流れ出す大河は、いずれも真っ赤な泥水を運び、川の生態系を根底から押しつぶしている。マングキ川中流域40キロの範囲で、5羽のフラミンゴしか養えないのである。

|| 南西部乾燥地帯での自然破壊の過程

マダガスカルの中中部高原から西部では、自然森林は数えるほどしか残っていないが、絶滅した原猿類12種は、すべてこの地域の遺跡から半化石として発見されている。

マダガスカル南西部の乾燥地帯での森林破壊は、どのように進んだのだろうか。5世紀ころに人類が初めてマダガスカルに到達した時、西部海岸から中央高地にかけては3種類の林が広がっていた。海岸部から水系に沿っては常緑樹林が、その上部にはやや乾燥した森林が、そして乾燥の強い南部の丘陵地帯ではマダガスカル独特の乾燥森林があった。この南部の乾燥森林は、マダガスカル独特のユーホルビア(トウダイグサ科)とディディエレア(固有科)によって構成されていた。この固有の森林は人の侵入を長くこぼしてきた。

水辺の常緑樹林は東海岸の熱帯雨林に近いもので、やや乾燥した森林は現在も中央部から北部でみられる林と同じものだった。西部から中央高地にかけての丘陵はなだらかで、1000年前には丘陵の頂上部のすぐ下から水が湧き、小川が網の目の

ように流れて、水系の常緑樹林とやや乾燥した森林はモザイク状に入り組んでいたと想像される。

中央高地から西部海岸までの地域での現在の極度の乾燥は、明らかに人為的なもので、マングキ川に残された水辺の常緑樹林内では、乾期の日中でも沢を流れる水は冷たく、風も冷たかった。自然森林に覆われていたところのマダガスカルの気候は、楽園のイメージにもっとも近い。

マングキ川の川辺の常緑樹林は、帯のように川を飾り、背景の低い丘を覆う灰色の乾燥森林との対比は鮮やかで、乾燥地域では水辺とその外での植生は、今も昔も極端に違っている。バオバブは、この水辺の常緑樹林の構成樹種である。バオバブは巨大な草のようなもので、木材としての利用価値がまったくないために伐採されず、樹皮を剥いても枯れない。大きなバオバブは枝が高いところにあるので、地上の火は届かず、他の木のように枝や葉に火がついて燃えることもない。このために、バオバブは水辺の常緑樹林が失われても残った。

西部海岸のムルンダバ近くには観光地になっている有名なバオバブの並木が見られるが、それは破壊され尽くした水辺の常緑樹林の名残りである。

野焼きはまず西部の平原地域と水系周辺の常緑樹林地帯で始められ、ゴリラほどの大きな原猿類の生活場所は人類の到着とともに失われた。

水系周辺から始まった常緑樹林の破壊は、牛がどこでも歩けるほどの緩やかな地形と長い乾燥期に助けられて、一挙に中央高原にまで広がった。高地になればなるほど、気温は下がり、雨量は増すので、人の生活圏として適しており、しかもそれは火をつけることだけで得られた。

人類がマダガスカルに到着してから数百年間は、森林を焼き払ってできる農地と森林に恵まれ、400キログラムを超す巨大なエビオルニス(ダチョウ類)や大きな原猿類や陸生のカメを食物にして、

人口も増加したと考えられる。しかし、中央高地まで焼け野原が広がり、水源が失われた後には、この楽園は暗転する。野焼きを繰り返した草原では人々は長くは生活できず、残された森林の周辺にしがみついて暮らすようになった。そこでは少なくとも、燃料と水が手に入った。

現在、西南部に点々と残された乾燥森林は、火による急激な開発の波に残された地域である。ユーフォルビアの原生林は、人間が住むには適当ではなかった。しかし、人々が他に住む場所がなくなって残された森林の周辺で暮らしてきたために、火はいつも森林のどこかを焼き、木は切られて、森は痩せ細ってゆく。こうして南西部の最後の森林にも手がつけられている。

こうして、人々は最後の拠点を失う。地を這うような生活の果てに、延々と続く焦土だけが見えている。……しかし、それはマダガスカルだけのことだろうか？

Ⅱ 焦土からの復活の手だてとして

送られてきた新聞の夜の地球の景観を見るたびに、問題の大きさ、深刻さがみえる。しかし、人工衛星から見られるほどの巨大な影響を、人類が地球に与えていることは、まだまだ実感としては私にはつかめない。

私はマダガスカルに動物たちの楽園を探しにきて、焦土をみたが、ここでなにが必要だろうか。植林と保護区の設定、環境保護教育は緊急に必要だけれど、まず焦土の事実を確認することも、根本的な解決に役立つかもしれない。事実を知るとはそれがどれほど苦いものであれ、抜本的対策の基礎となる。森林はどこにどんなものが残されているのか？ それが年々どういうふうに変わっているのか？ 動物たちはどこに何がいるのか？

しかし、ただそれだけのことが、ここマダガスカルではまったく分かっていない。1990年に国際自然保護連合(IUCN)は「レッド・データ・ブック」の一環として「マダガスカルとコモロの原猿類」を出版したが、その分布図は82年のタターサルのものでほとんど変わらず、しかもそれまた、ペテらが77年に出版した「フォーナ・ドウ・マダガスカル」の孫引きにすぎない。しかもこのペテの原論文でさえ、森林のあるらしい所を枠線で囲むというラフなものだった。

それには理由もある。マダガスカルの道路事情では、ある地点に行くこと自体が冒険で、下手をすると私のように、脱水症状で倒れることになりかねない。しかし、それでもそこをしっかりとっておかないと、1970年代から90年までのように、まったく同じ分布図を孫引きで使うことになる。

日本では、1978年に第2回「緑の国勢調査」で初めて哺乳類の分布調査を全国規模で実施した。私もこの調査に検討委員として参加したが、この調査で完成した哺乳類の分布図は、日本の動物保護や自然保護を計画するためのもっとも重要な基礎データとなった。それを少し粗い精度であれ、マダガスカルでやってはどうだろうか。50キロほどの区画を単位として、マダガスカル全土を調査してはどうだろうか。なにしろ焦土の方が広いから、実際に調査しなくてはならない区画は300程度なので、5年間かければ実現できると考えている。

マダガスカルでは、1990年12月に環境憲章が制定され、94年8月には環境省ができた。先日、環境大臣や環境保護関係のNGOの代表に会う機会があったのでこのプランの話をしたが、皆大いに乗り気だった。日本がこういう面でも国際協力できるといいのだが。これこそ世界から日本が期待されている領域なのだが。

(しま・たいぞう/JICA専門家)